

「国語」としての漢文教育を考える

上野 美優
教科領域コース

1. はじめに

中等国語科の教育課程において古文や漢文を教材として扱うことの意義の一つに、言葉を介して日本の伝統的な思想や文化を学ぶことが挙げられるだろう。本実践研究報告書は、文学作品としての言葉が、思想や文化といかに相関関係にあるかを古文と漢文の比較を通して示すことを提案するものである。

2. 古文漢文融合の教材研究の例

報告で扱った融合教材は①『源氏物語』と「長恨歌」(白居易)、②『枕草子』と「香炉峰新ト山居、草堂初成、偶題東壁」(白居易)である。実際に授業実践を行った②を例として示す。

『枕草子』第二八〇段 「雪のいと高う降りたるを」(抄録では本文のみを提示する)

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして、物語などして集まり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑わせ給ふ。人々も「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ。なほこの宮の人には、さべきなめり」と言う。

「香炉峰新ト山居、草堂初成、偶題東壁」(抄録では本文のみを提示する)

日高睡足猶慵起	小閣重衾不怕寒	遺愛寺鐘敬枕聽	香炉峰雪撥簾看
匡廬便是逃名地	司馬仍為送老官	心泰身寧是歸處	故郷何独在長安

両作品の共通している部分について

「雪のいと高う降りたるを」の中では、雪が降っている状況下で簾を上げて雪が見たいという中宮定子の意図とそれを漢詩になぞらえて答えた清少納言の様子が描かれている。また、中宮定子の意図を理解し、機転を利かせた清少納言を他の女房たちがたたえている様子も描かれている。「香炉峰新ト山居、草堂初成、偶題東壁」の漢詩の中では、白居易自身が官職や名利から離れた「匡廬」という場所で暮らす様子が描かれている。二つの作品とも、自然に触れて生活する様子が描かれている。また、『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」の中では中宮定子が「簾を上げて雪をみたい」と言っていることから、自然に触れて生活することに楽しみや喜びを感じているのではないかと考えられる。「香炉峰新ト山居、草堂初成、偶題東壁」の漢詩では匡廬は自然豊かな場所であるということが伺える。そして作者の白居易はこの匡廬を「安住の地」と述べている。このことから「香炉峰新ト山居、草堂初成、偶題東壁」の漢詩でも自然に囲まれて生活することの喜びや楽しさが描か

れているということが読み取れるだろう。そしてこの「自然に囲まれて生活することの楽しさを喜びが詠われている」ということがこの二つの作品の共通点であると推測することができる。

3. 授業実践の概要

2025年9月に茨城県内の県立高等学校にて実施した授業実践の概要について報告する。今回の授業実践では、進学クラスを含む第一学年全四クラスで実践を行った。単元名を「関連のある古文と漢文の作品を比較しながら、古典の世界に親しもう」と設定した。

指導の計画（4時間扱い）

第一時…漢文の基本的な読み方について確認する。

第二時…『香炉峰下新ト山居』の前半部分（日高睡足猶慵起～香炉峰雪撥簾看）の書き下し文や現代語訳について確認する。

第三時…『香炉峰下新ト山居』の後半部分（匡廬便是逃名地～故郷何独在長安）の書き下し文と現代語訳について確認する。

第四時…『枕草子』「雪のいと高う降りたるに」の内容を確認する／『枕草子』「雪のいと高う降りたるに」と『香炉峰下新ト山居』の比較を行う／宮中の生活について理解する／現代であれば、中宮定子と清少納言はどのようなやりとりをしていたのかを考える。

実践結果について（抄録においては第四時に絞って報告する）

第四時では、まず、「香炉峰下新ト山居」の内容を復習したのち、『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」の内容について確認した。本文と現代語訳もこちらで用意をした。本文を読んだ後、登場人物の確認などをした。そののち、「雪のいと高う降りたるを」の内容を理解するために必要な知識の定着として、平安時代の宮中での生活について確認した。この時、進学クラスの一組では、「香炉峰下新ト山居」と『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」の同じ部分を生徒たちに探させた。その後、「中宮定子がいった香炉峰の雪とは何のことか」や「中宮定子が笑ったのはなぜか」といった問いについて考えた。そして、最後にこの単元のまとめとして「現代であれば、中宮定子と清少納言はどのようなやりとりをしていたらだろうか」という問いについて考えた。この問いについては、①雪のいと高う降りたるをと同じ状況で②中宮定子・清少納言の言いそうな言い回しでといった条件をつけることで、本文の内容から離れることなく、問いを考えられるようにした。また、教師側が例を示し、何を書いたらよいかかわからないという生徒を少しでも減らせるよう留意した。

第四時の終了後に、「香炉峰下新ト山居」の習熟度を確認するアンケートを実施した。
アンケートの項目を掲げる。

項目一：「香炉峰下、新ト山居、偶題東壁」で学んだ中で印象に残っている部分はどこですか。

項目二：「雪のいと高う降りたるを」で一番面白いと思う部分はどこですか。

項目三：「香炉峰下、新ト山居、偶題東壁」と『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」の共通している部分はどんなところだと思いますか。自分の考えを書いてください。

この項目三については、成績表の思考力・判断力・表現力の評価の部分に含むとした。

実践報告において、生徒の回答を抽出し表にまとめたが、抄録では一部掲げる。

表：アンケートの回答（一部のみ）

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒E	生徒F	生徒G
項目一	・身も心も穏やかでいられる場所こそ人間にとっての安住の地	・静かな山里で新しい草堂が自然と調和している情景	・昔の人も今と起きるのが面倒がっており、今も昔あまり変わらない部分で印象に残った。	・草堂ができた喜びを自然の景色と落ち着いて読んでいるところ	・昔の人でも冬の朝が辛くて、布団にくるまっていたという部分	・安住の地という場所について	・故郷何独在長安 ・心泰身寧是帰処 ・匡廬便是逃名地
項目二		・降り積もった雪をただの情景としてではなく、美しいものと捉えているところ	・清少納言の教養の高さが「簾を上げる」という行為だけでわかってしまうところ	・中宮定子の問いに対して漢詩を用いて答えた知的なやりとり	・中宮定子の問いに清少納言が漢詩を用いて答えたところ	・中宮定子が笑った理由が微笑ましい	・さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ。なおこの宮の人はさべきこそなめり
項目三	・季節や冬の美しさを述べているところ	・自然の美を味わう風流な心が共通している。	・「布団を重ねている」「火鉢に火を起こしている」という寒さから暖を取ろうとしている表現が見られるところ	・どちらの作品にも「雪」という情景を見て、美しさを味わう気持ちが表れている。	・両方とも自然美を文章にしているところ。	・珍しいことではなく、日常の何気ない出来事。しかしどこか儚さを感じるところ。	・「火鉢に火をおこして」→寒い ・「衾を重ねて」→寒さが共通している。

アンケート結果の分析

項目一の「香炉峰下、新ト山居、偶題東壁」で学んだ中で印象に残っている部分はどこですか。」という問いについては、「安住の地という場所について」「静かな山里で新しい草堂が自然と調和している情景」「睡眠も十分だがまだ起きるのは面倒だということ。昔の人も同じような感覚をもっていると思い印象に残った。」という回答が多かった。ここから項目一については、情景描写や現在と昔の生活との対比について考えている生徒が多いということが分かる。項目二の「雪のいと高う降りたるを」で一番面白いと思う部分はどこですか」という問いについては、「清少納言が簾を上げさせて、外の雪を確認してところ」「中宮定子の問いに清少納言が漢詩を用いて答えたところ」など中宮定子と清少納言のやりとりが面白いと感じている生徒が多かった。項目三の「香炉峰下、新ト

山居、偶題東壁」と『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」の共通している部分はどんなところだと思いますか。自分の考えを書いてください。」という問いについては、「人間の生活風景が描かれている」「雪景色を見て気持ちが動いたところ」など雪景色や日常の出来事という部分に共通点を見出している生徒が多かった。また、その他にも「布団を重ねている」「火鉢に火を起こしている」という寒さから暖をとろうとしている表現が共通している」という両作品の寒さに関する部分に共通点を見出している生徒もみられた。

授業実践の成果と課題

今回の授業実践は、古文と漢文の分野を横断した学びの実践ということをテーマに行った。そのため、第四時以外の各時間も全て第四時ありきの内容となってしまう、第二時・第三時において漢詩一つ一つの表現を取り出して、深く考えるということができなかった。その点が今回の授業実践における課題だと感じている。また、第四時においても一組以外のクラスでは、「雪のいと高う降りたるを」の中で「香炉峰下新ト山居」と同じ部分を探すという活動を行わなかったため、生徒たちがあまり二作品の関連性を意識できていなかった。

4. おわりに

今回の研究実践報告では、「「国語」としての漢文教育を考える」をテーマに教材研究と授業実践を行ってきた。文化、思想、習俗は、言葉の世界によって規定されている。古代日本人は、中国の文献を漢文・漢詩として受容し、日本の古文というスタイルを作り出し、それらが総合されて日本文学の世界が成り立っていった。人は言葉を通してあらゆる事物を認識し、自己を表現していく。漢文的な思考方法を得て、視野は広がり、表現もより豊かになり、その一方で、逆説的に日本人としての自覚もより強くなったかも知れない。「国語」としての漢文の存在は、日本人の精神史を理解する上でも欠かすことの出来ないものである。

【参考文献】

川合康三訳注、岩波文庫『白楽天詩選（上）』、岩波書店、二〇一一年。

松尾聰・永井和子校注訳、新編日本古典文学全集『枕草子』、小学館、一九九七年。